

シラバス

科目名	ソフトウェア活用	単位数	3単位	学年・学科	2学年 流通ビジネス科・国際ビジネス科	選択 I								
教科書名	教科書番号（出版社） 教科書名 商業736 実教出版 ソフトウェア活用			副教材名										
科目の目標	商業の見方・考え方を働かせ、実践的・体験的な学習活動を行うことなどを通して、企業活動におけるソフトウェアの活用に必要な資質・能力を次のとおり育成することを目指す。													
学習内容と進め方	さまざまなアプリケーションソフトウェアの機能・使用方法や効果的な運用について、教科書の内容に基づく実習を行いながら学習する。													
学習の留意点	科目「情報処理」で学んだハードウェア、ソフトウェア、ネットワークの知識を基に、オフィスのネットワークを構築・管理できる知識と技術、データベースソフトウェアによるシステム構築を学ぶ。													
月	単元	時数	具体的な学習内容	評価の観点			備考（評価項目）							
				1	2	3								
4	1 企業活動とソフトウェアの活用	5	1 ビジネスにおけるソフトウェアの活用 2 ビジネスにおけるソフトウェアの進化 3 手続きの自動化 4 データベースの構造 5 SQLの操作	○	○		教科書およびPC実習 ・ビジネスにおけるソフトウェアの活用について理解しているとともに、関連する知識を身に付けている。 ・ビジネスにおけるソフトウェアの活用と目的について認識し、企業活動と関連付けて考え判断し表現できる。							
5	2 情報通信ネットワークの活用	9	1 情報通信ネットワークの導入と運用 2 情報資産の保護	○	○		・ネットワークの構成に必要なハードウェア、ソフトウェアと、その設定に関連する知識と技術を身に付けている。 ・ネットワーク構築に必要なハードウェア、ソフトウェアを適切に選択でき、適切な判断に基づくデータの保護やセキュリティ管理の基準を表現できる。 ・財務情報や販売情報の分析方法、活用に関連する技術を身に付けている。/							
6	3 表計算ソフトウェアの活用	29	1 表計算ソフトウェアを用いた情報の集計と分析 2 表計算ソフトウェアを用いたオペレーションズ・リサーチ 3 手続きの自動化	○	○	○	・マクロ機能を用いた手続きの自動化についての知識と技術を身に付けている。 ・財務情報や販売情報の分析結果から、企業の財政状態や経営成績、販売動向などを判断でき表計算ソフトウェアを活用して分析結果を的確に表現できる。 ・財務情報や販売情報に関心を持ち、表計算ソフトウェアの機能を利用した分析実習に積極的に取り組み、自ら進んで知識・技術を身につけようと主体的かつ協働的に取り組んでいる。							
7								4 データベースソフトウェアの活用	21	1 ビジネスとデータベース 2 データベースの作成と操作	○	○	○	前期中間考査 ・データベースの役割と仕組み、構造やリレーションシップの意味を理解している。テーブル・クエリ・フォーム・レポートの機能と関連について、SQLの文法を理解した上で操作の技術を身につけている。 ・業務の特性に合わせて、データベースの効果的な活用方法を判断でき、処理の内容によってマクロ機能やSQLを適切に使い分けができる。 ・ビジネスにおけるデータベースの活用に関心を持ち、知識・技術を積極的に身につけようと主体的かつ協働的に取り組んでいる。
8														
9	5 業務処理用ソフトウェアの活用	11	1 グループウェアの活用 2 販売管理ソフトウェアの活用	○	○	○	前期末考査 ・グループウェア・販売管理・給与管理などのソフトウェアについて、そのしくみや活用のメリットを理解し、適切に活用する知識・技術を身につけている。 ・ビジネスにおける情報の一元管理や情報の共有の重要性を理解した上で、適切な業務処理ソフトウェアを選択して、効率的な活用を判断することができる。 ・ビジネスにおける情報の一元管理や情報の共有の重要性を理解した上で、適切な業務処理ソフトウェアを選択して、効率的な活用を思考することに、主体的かつ協働的に取り組んでいる。							
10	6 情報システムの開発	30	1 システム開発の基礎 2 アルゴリズムの基礎	○	○	○	後期中間考査 ・システム開発における代表的な開発モデルと開発手法について、基礎的な知識・技術を習得している。アルゴリズムの基本を習得し応用的な活用技術を身につけている。 ・システムの開発の手順や開発モデルを理解し、各手順の目的や開発の内容を適切に説明できる。データ処理の目的に応じた処理を自ら考え、アルゴリズムなどに表現することができる。 ・システムの開発に興味を持ち、その設計や作成の方法を積極的に学んでいる。ソフトウェアの特色を生かした実習に積極的に取り組み、主体的かつ協働的に取り組んでいる。							
11														
12														
1							学年末考査							
2														
3														
評価方法	(1) 評価の観点は下記のとおりとする。 (2) 具体的には定期考査や実習課題・作品評価、学習活動への参加態度等から評価する。													
評価の観点	観点	趣旨												
	1. 知識・技能	・企業活動におけるソフトウェアの活用について実務に即して体系的・系統的に理解するとともに、関連する技術を身に付けている。												
	2. 思考・判断・表現	・企業活動におけるソフトウェアの活用に関する課題を発見し、ビジネスに携わる者として科学的な根拠に基づいて創造的に解決しようとしている。												
	3. 主体的に学習に取り組む態度	・企業活動を改善する力の向上を目指して自ら学び、企業活動におけるソフトウェアの活用に関心を持ち、主体的かつ協働的に取り組もうとしている。												

評価基準	1. 知識・技能	<p>A ソフトウェアの基本機能・連携処理などを正確に理解・把握し、問題解決のための適切な関数式・条件を構築することができる。</p> <p>B ソフトウェアの基本機能・連携処理などを理解し、処理に関わる関数式・条件を構築することができる。</p> <p>C ソフトウェアやそれに関わる機能および処理内容について、基本的な知識を理解するために努力が必要である。</p>
	2. 思考・判断・表現	<p>A ソフトウェアの機能・連携処理および特色などを正確に理解・把握し、問題解決のための適切で効率的な手法選択をすることができる。</p> <p>B ソフトウェアの機能・連携処理および特色などを理解し、問題解決のための適切な手法選択をすることができる。</p> <p>C ソフトウェアの機能・連携処理および特色などの理解と、問題解決のための適切な手法選択をするために努力が必要である。</p>
	3. 主体的に学習に取り組む態度	<p>A ソフトウェアに関する関係知識や機能などを積極的に理解し、主体的かつ協同的に取り組み活用することができる。</p> <p>B ソフトウェアに関する関係知識や機能などを理解し、主体的かつ協同的に取り組むことができる。</p> <p>C ソフトウェアに関する関係知識や機能などの理解と活用について、主体的かつ協同的に取り組む努力が必要である。</p>